

飛び込み台のある立派なプール。モノクロの写真で並んで微笑むのは水泳のカンボジア・ナショナルチームの選手たちだ。中央でサングラスをかけているのが、1966年、青年海外協力隊の初代水泳隊員として派遣された中村昌彦さんだ。



当時、ナショナルチームで指導を受けたヘム・トンさん（71）は、「とにかく厳しい指導者でした。試合で負けるぐらいなら練習で死ぬ、と言われたことを

今もはっきり覚えています」と、話す。

JICAが発行する「青年海外協力隊 20世紀の軌跡」によれば、1965年度に始まったカンボジアへの協力隊員の派遣は、農業部門と体育スポーツ分野に集中した。1966年1月に赴任した第一陣は、稲作指導の2人と、柔道、水泳の指導者各1人の計4人だった。

「厳しい練習の毎日、こっそり水の中で泣いていました」。ヘム・トンさんは懐かしそうに言う。それでも選手たちが中村さんについていったのは、成果が出ていたからだ。当時の記録によると、中村



さんの指導した選手は約3か月後に次々にカンボジア新記録を出したという。

ヘム・トンさんは、中村さんの帰任後に迎えた日本人コーチを含め「日本人以上に素晴らしい水泳コーチはいなかった」と、振り返る。「他国のコーチもたくさん来ましたが、私は今でも日本人の指導方法が、最も素晴らしいと思っています。厳しいだけで

なく、理にかなっている。だから、私自身も選手たちには日本式で指導してきました」

ポル・ポト時代後の1980年、ヘム・トンさんはカンボジア水泳の復興に取り組み始めた。水泳連盟を再興し、選手を一から育てることに力を注いだ。とはいえ、まだ混乱の中にあったカンボジアで水泳に関心を持つ人たちは少ない。ヘム・トンさんは自分の子供たちに水泳を教えた。その結果、5人の子供のうち3人、さらにその孫が水泳選手となって活躍。アトランタ、シドニー、北京、ロンドンでの五輪にも参加した。

内戦の混乱を経ても、水泳隊員のまいた種は受け継がれ、枯れることなく育っている。